



Title	北方文化研究室顛末
Author(s)	高倉, 新一郎
Citation	北大百年史, 通説, 962-975
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/30048
Type	bulletin (article)
File Information	tsusetu_p962-975.pdf



[Instructions for use](#)

北方文化研究室顧末

高倉 新一郎

1 北方文化研究室の誕生

北方文化研究室は一九三七年（昭和一二）十月「北方文化研究室規程」によって誕生した。

場所は旧図書館（今日の農学部図書館）東隣の旧農学部昆虫学教室であつた。ちょうど昆虫学教室が農学部新館に移り、旧教室が図書館に近い上に、後方に石造の昆虫標本室が附属していて文献・標本などの所蔵に便利だったからである。

計画・規程の作成などは、図書館の育て親であり当時総長であつた高岡熊雄博士の下で養成された司書官柴田定吉が当時図書館長の上原轍三郎教授の指揮の下に、主としてこれに当たつた。

北方文化研究室規程は次のようなものであつた。

第一条 本学ニ北方文化研究室ヲ置ク

第二条 本研究室ハ北方文化ニ関スル研究ヲ為スヲ以テ目的トス

第三条 本研究室ニ研究室主任ヲ置ク

第四条 研究室主任ハ総長監督ノ下ニ於テ事務ヲ掌理ス

第五条 本研究室ニ委員若干名ヲ置キ研究事項ヲ分担ス

第六条 本規程ノ施行細則ハ別ニ之ヲ定ム

附 則

（本規程ハ昭和十二年十月十三日ヨリ之ヲ施行ス

（但し細則は申合せだけでついに成文化されなかつた。）

当時北大には北方文化研究室を持つ動機が熟しつゝあつた。

農・医・工・理と理科系統のみの学部を持つにすぎない北大では、農学部の農業経済学科のみが文科系統の研究・教育を任とした部局であつた。この学科は既に札幌農学校当時から存在し、その草分けともいふべき佐藤昌介・新渡戸稻造らがその中

心として北海道開拓の社会面を研究・指導し、我が国における新生面を開拓した。当時の総長高岡熊雄はこの二人の跡を受けて、その伝統を確立しつつあったのである。しかし、わずかに一学科（五講座）の弱体であり、研究者・学生数も少なく、他大学では学部を構成せねばならぬ分野を満たすことは困難だった。一面文科系統の学部を設置する必要は、北海道の開拓が進むにつれて、殊に我が国の進路が海外移民に傾くとしたいに重視され始め、進んでは文化系研究・教育との協力なくしては技術教育も制約を被るとの見解から、主張されるに至っていた。

そこへ一九三二年（昭和七）十二月日本学術振興会が作られ、学術研究に対して広く研究補助金を出すことになり、校費では研究し得ない方面の研究が行われるようになった。北大でも多くの研究者が研究補助金を得たが、中でも大きなものは、設立と同時に第二特別委員会として設けられた「満洲農業移民問題並に北支資源の研究」に高岡熊雄を中心として北大農業経済学研究室のスタッフが協力したこと、および第八小委員会として設けられた「アイヌの医学的・民族生物学的研究」に北大医学部のスタッフの多数が参加したことであった。とりわけ、後者は純理学的研究のほかに文化的研究に及ばざるを得なかった。殊に児玉作左衛門を主班とする解剖学教室では、大規模なアイヌ墳墓の発掘によってアイヌの骨格の蒐集を行い、これを基礎

として研究を進めたが、それには伴出した副葬品を中心に民俗学的調査研究を必要とした。これがために標本室が設けられ、蒐集品を陳列し、これが北大の一名物となって、見学者が多くなり、アイヌとは何ぞやという質問が民族生物学的方面のみならず文化方面からも提出されるようになり、このためにも北大の衆智を集める必要が痛感された。学術振興会補助の研究が終わりに近づいたとき、北大に、北方文化研究機関を設けようとする議が起こってきたのは当然だった。

間もなく高岡総長は満期退任となった。この研究室が発売したのはその後、次期総長前医学部教授今裕の下においてであった。今総長は自ら「アイヌ研究」の一員としてアイヌの刺繍文様を研究しており、画をよくする文化人だった。予算は初年度二五〇〇円、次年度以降一五〇〇円だった。もちろん文部省の公認を経たものではなく、北大に配分される経費の中から支出されていた。

組織は委員・研究員・事務員よりなり、図書館長農学部教授上原敏三郎が主任、委員は各学部から教授が一名ずつ選出された。農学部犬飼哲夫（応用動物学）、医学部児玉作左衛門（解剖学）、工学部鷹部屋福平（コンクリート建築）であり、後に大飼委員の函館転出によって理学部鈴木醇（地質学）が選ばれた。研究員としては農学部助手高倉新一郎（兼司書官）、同名

取武光（博物館勤務）、医学部助教伊藤昌一があり、後樺太博物館から知里真志保が加わった。事務は上原主任の下に司書官柴田定吉、高倉新一郎が担当し、事務員としては図書館の会計・庶務担当者の兼任とともに武宮・金子・池島・矢島の四臨時雇員が任命された。

2 北方文化研究室の活動

北方文化研究室が誕生した一九三七年八月、北海道庁が編纂中の『新撰北海道史』七巻が完成し、一九一五年（大正四）以来の北海道史編纂掛（学務部所管）が廃止された。同掛にはその期間に多くの史料を蒐集していたが、これが掛の廃止によって散佚するおそれがあったので、編纂主任牧野信之助はそれを心配し、これを一括北海道大学に寄託することを希望し、北大ではこれを北方文化研究室に受け入れることになった。道史編纂掛は高岡総長が編纂顧問であり、高倉助手がその囑託となつて参加していたからである。

研究室では直ちにその目録を作成し、寄託史料は大学において自由に利用し、道庁の許可ある場合には北大に關係がない一般人にも公開することにした契約書を交換した。「北海道庁寄託書目録」によれば活字本四八九冊、写本同類五四〇冊、写真二三九部、町村概覧九七二、その他資料（主として簿書附属図類）八

二四（四一袋）、計約三〇六四点であった。それによって札幌農学校以来蓄積され、農学校が北海道庁管轄から文部省に移つて以来道庁から分離されていた文書が合併され、北大は明治以後の北海道文獻に關しては道庁をしのぎ全国一を誇るに至つた。

開設以来研究が蓄積されたので、それを発表するため『北方文化研究報告』を刊行することになり、一九三九年（昭和一四）三月第一輯を刊行、続いて第二輯を出したが、翌年より年一回となった。菊判二〇〇―三〇〇ページで、内容はアイヌに關する研究が多く、その方面に優秀な調査・研究が発表され、斯学界より注目を浴びることになった。

3 北方文化研究室の変遷

業績が認められるにつれて来室者が増加していった。最初はアイヌ・土俗關係の資料を蒐集展示したが、一九三八年医学部解剖学教室の標本室が新築拡大されたためアイヌ關係標本はこれを主とすることになり、研究室も縮小されて、ようやく標本室内に道庁寄託書を主とした書庫を設け、図書購入費も削減を受けると同時に、図書館において賓客のあるときに展示していた北海道開拓を示す史料を常設展示することになり、その最良のものとして北海道地図の変遷を展示することになった。

戦争はしだいに激しくなり、来客は多くなつたが、研究活動

は不自由になり、『北方文化研究報告』も第六輯限りで発刊不能のため休刊のやむなきに至った。

北方文化研究室が研究活動を再開したのは一九五二年（昭和二七）三月『北方文化研究報告』第七輯の刊行からであった。戦後北大には法文学部が設置されることになり、この号に早くも講師知里真志保と助教授護雅夫が加わり、北方民族の研究に新生面を開いた。主任は上原教授の退任によって児玉教授が主任となり、農学部より高倉教授が、理学部より名取武光助教授（人類学）、法経学部より山口和雄教授が、文学部より知里真志保講師が委員となり、新たに幹事として児玉主任の教室の大場利夫講師が加わり、豊田事務官とその運営に当たることになった。研究報告は以後年一回三月に定期的に刊行され、一九六四年（昭和三九）研究室が文学部研究施設として発展的解消をするまで継続し、第二〇輯を数えた。当時研究室予算は図書館予算の中で処理され、わずかに研究報告を刊行するにとどまり、研究員には文学部講師となるまでの若干期間知里研究員に支給されたことはあるが殆んど全部が学部の自分持ちの研究費で行われた。それでいて投稿原稿料は無料、ただ掲載誌三冊と別刷三〇部を贈呈するにとどまっていた。報告は国費で印刷されるため発送先は制限され、印刷部数は五〇〇部だったと記憶する。

一九六五年、図書館長になった高倉委員が主任となった。主

任は委員の互選によることになっていて、児玉主任と高倉主任との間に犬飼委員が主任だった時代があった。

4 北方文化研究室の移転

一九五三年（昭和二八）北大にスラブ研究室が開設され、学外の研究者も加わって研究組織を作ることになったが、当時北大にはそれに当てるべき建物がないため、五五年北方文化研究室を農学部新館四階に移し、従来の建物をそれに当てたいとの議が起こり、スラブ研究の北方文化研究における重要性にかんがみ、その方針に協力することになった。同時に豊田事務官は退任し、事務は図書館園田事務官兼任で、これも辞任した柴田司書官が囑託としてその経営管理の指揮に当たることになった。常設展示はできなくなった。

元来北方文化研究室は委員によって運営され、委員は教授中より各学部の推薦によって任命され、『北方文化研究報告』への論文掲載も主任の許可もしくは委員との共同研究でなくては許されなかったが、一九五九年（昭和三四）より委員の任命範囲を拡大し、論文掲載者の条件も緩和することになった。そのため、後この方面の若手として活躍する和田完・谷本一・原田一典・林善茂らの勝れた論文を世に問うことができた。

委員としては工学部より横山尊雄教授、教育学部留岡清男教

授（六五年辞任によって鈴木朝英教授）、法学部鳥山成人教授を加え、五九年よりは山口委員の代わりに経済学部林善茂助教授、児玉委員の代わりに伊藤昌一教授、それに理学部より佐々保雄教授、文学部より阿部武彦教授が加わり、医学部大場利夫講師も委員となった。

利用者はしだいに数を増し、殊に外部よりの篤学者で所蔵文献を利用する者が多くなつた。

中には趣旨に賛同し、文献その他を寄贈する人も多くなつた。殊に鈴木（醇）・山口・大銅委員らと親交のあつた渋沢敬三は来道の度に研究室を訪れて関係者を励まし、「北海道殖民地処分地図」、「ライマンの地質報告原稿」その他貴重な文献資料の購入を援助した。

しかし関係者はすべて兼任であり、日常詰めて管理事務に当たる者は戦後司書官を退いた柴田囑託だけになつたので、平常の史料閲覧と研究報告の刊行が手いっぱい、それも多くは図書館の援助によるありさまだつた。ただ一九六二年（昭和三七）ころより幹事として参加した大場利夫医学部講師の努力により、とどきき広く学内研究者の講演を聞く会を持つことができたのは幸せだつた。

5 北方文化研究室の発展的解消

一九六四年（昭和三九）四月国立大学校設置法施行規則により研究部門、研究施設が規定され、研究施設は大学の研究教育機関に所属し、文部省の公認を得なければ、大学の施設および予算を使用することが許されなくなつた。北方文化研究室ははつきりした所屬がなく、経費もわずかに図書館に属するものからその一部を割かれているにとどまつた。委員などの任命も内部のものにすぎず、正式の専属教職員を持たなかつた。故に新制度の下では存続することができず、大学研究所として新しく認められるか、いずれかの学部の施設となる必要があつたが、当時研究所としての設立は困難であり、研究施設としては文学部に属するはかばかになかつた。

あたかもよし、文学部では時の文学部長金子武蔵教授が文学部に研究施設を持つ構想を持っていた。北方文化研究室は、もしこうした研究室ができるならばこれに合流するのが最善と考え、高倉主任は金子学部長に研究室の歴史・内容を明らかにした文書を手交し、文学部の研究施設の設立に当たつて、既に評価のある北方文化研究室を土台にすべきことを献言した。

幸いにこの意見が入れられ、一九六六年文学部に北方文化研究施設が誕生するとともに、最初に設けられた考古学部門教授として大場利夫が迎えられた。北方文化研究施設の研究報告としては、既に計画刊行されていた『ユーラシア文化研究』

と、一九六五年十二月二〇号をもって刊行を打ち切った『北方文化研究報告』を合併して『北方文化研究』を継続発行することとした。資料は中央図書館に北方資料室を設けてそれに継承し、北海道庁よりの寄託資料は、後一九七〇年(昭和四五)道庁に保管さるべき簿書類は返却し、ほかは永久寄託となつて、開設以来三〇年の北方文化研究室は解消されたのである。

6 北方文化研究室の業績

今、北方文化研究室の業績を見るために研究報告の総目次を挙げると次のごとくである。

○第一輯 一九三九年(昭和一四)二月二十五日発行

巻頭之辭

北方文化研究室設立の趣旨

アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究 児玉作左衛門

アイヌの木皮舟 犬飼 哲夫

アイヌ屋根の研究と其構造原基体に就て 鷹部屋福平

近世に於ける樺太を中心とした日滿交易 高倉新一郎

北海道開拓初期に於ける土地制度 上原轍三郎

○第二輯 一九三九年十月十五日発行

アイヌ住居の研究

鷹部屋福平

アイヌの文身の研究

児玉作左衛門

イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(一)

犬飼 哲夫
名取 武光

我国に於ける樺太地図作製史
—北日本地図作製史 第一報—

高倉新一郎
柴田 定吉

○第三輯 一九四〇年五月十日発行

北海道開拓第三期に於ける土地制度

上原轍三郎

イオマンテ(アイヌの熊祭)の文化的意義とその形式(二)

犬飼 哲夫
名取 武光

北海道噴火湾アイヌの捕鯨
樺太アイヌ文身の研究

名取 武光
児玉作左衛門
伊藤 昌一

アイヌ住居の研究—アイヌ家屋の北方的特徴(附録アイヌ建築語彙)

鷹部屋福平

我国に於ける千島地図作製史
—北日本地図作製史 第二報—

高倉新一郎
柴田 定吉

○第四輯 一九四一年三月十日発行

アイヌのベカンベ祭(麥取り祭)

犬飼 哲夫

樺太オロッコの海豹獵

犬飼 哲夫

沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来と

ヌサ
名取 武光

アイヌ民族の使用したる計量の単位並に

「音」の名称に関する研究

デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て

○第五輯 一九四一年七月二十五日発行

アイヌの髪容の研究

シシャモカムイノミ(柳葉魚)

アイヌ住居の研究——日高平取方面に於ける地方性

北海道開拓第四期に於ける土地制度

第六輯 一九四二年十月三十日発行

我國に於ける北海道本島地図の変遷(一)

—北日本地図作製史 第三報—

アイヌ服飾紋様の研究

天災に対するアイヌの態度(呪ひその他)

アイヌ髪容の研究 補遺

鷹部屋福平

高倉新一郎

柴田 定吉

○第七輯 一九五二年(昭和二七)三月二十五日発行

北海道の鹿とその興亡

呪師とカワウソ

「矢を分け與へる話」について

—北アジャシャーマニズムの研究の一節—

我國に於ける北海道本島地図の変遷(二)

鷹部屋福平

児玉作左衛門

伊藤 昌一

犬飼 哲夫

鷹部屋福平

上原轍三郎

高倉新一郎

柴田 定吉

鷹部屋福平

犬飼 哲夫

児玉作左衛門

伊藤 昌一

犬飼 哲夫

鷹部屋福平

高倉新一郎

柴田 定吉

鷹部屋福平

犬飼 哲夫

知里真志保

護 雅夫

高倉新一郎

—北日本地図作製史 第四報—

礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て

○第八輯 一九五三年三月二十五日発行

蝦夷風俗画について

函館市住吉町遺跡の発掘について

古代—トルコ族(高車)の始祖説話について

アイヌの丸木船の作製

樺太アイヌの神謡

○第九輯 一九五四年三月二十五日発行

アイヌの神諭

アイヌの鮭漁に於ける祭事

シベリア岩壁画とフゴツベ洞窟彫刻

函館市春日町出土の遺物について

蝦夷に関する耶蘇会士の報告

○第一〇輯 一九五五年三月二十五日発行

柴田 定吉

児玉作左衛門

大場 利夫

高倉新一郎

護 雅夫

高倉新一郎

工藤 長平

柴田 定吉

児玉作左衛門

大場 利夫

高倉新一郎

児玉作左衛門

大場 利夫

護 雅夫

犬飼 哲夫

武笠 耕三

知里真志保

知里真志保

犬飼 哲夫

護 雅夫

児玉作左衛門

大場 利夫

児玉作左衛門

高倉新一郎

工藤 長平

護 雅夫

高倉新一郎

工藤 長平

北方遺跡について

往時の北洋の臘肭獸船

千島樺太の開発と土人

網走市大曲洞窟出土の遺物について

南シベリアにおける漢代の建築趾

モヨロ貝塚出土の骨角器

アイヌの散文物語

○第一一輯 一九五六年三月二十五日発行

あの世の入口

北海道アイヌのアザラシ及びオットセイ

狩り

北海道地図の変遷 補遺

根室国温根沼遺跡の発掘について

南シベリア イェニセイ河流域の原住民

モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器

○第一二輯 一九五七年三月二十五日発行

アイヌ語の特殊語について

明治以前の北海道に於ける農牧業

樺太犬考(一)

北大調査団

犬飼 哲夫

高倉新一郎

児玉作左衛門

大場 利夫

護 雅夫

大場 利夫

知里真志保

知里真志保

山田 秀三

犬飼 哲夫

森 樊須

高倉新一郎

児玉作左衛門

大場 利夫

護 雅夫

大場 利夫

知里真志保

高倉新一郎

犬飼 哲夫

遠軽町下社名淵(家庭学校)遺跡の発掘

について

若生貝塚発掘報告

モヨロ貝塚出土の石器

エドウィン・ダン著 我が半世紀の回想

○第一三輯 一九五八年三月二十五日発行

幌別町のアイヌ語地名

樺太犬考(二)

湧別遺跡の発掘について

入江貝塚

アイヌの耕耘技術

南樺太土着民における偶像

アイヌの五弦琴

ラブレットについて

芳賀 良一

児玉作左衛門

大場 利夫

名取 武光

峰山 巖

大場 利夫

高倉新一郎

原田 和幸

知里真志保

山田 秀三

犬飼 哲夫

竹内 忞

芳賀 良一

児玉作左衛門

大場 利夫

名取 武光

峰山 巖

林 善茂

和田 完

谷本 一之

児玉作左衛門

大場 利夫

○第一四輯 一九五九年三月二十五日発行

アイヌの収穫・貯蔵技術

樺太アイヌの偶像

樺太千島アイヌのイナウとイトクバ

所謂クツクルケンについて

天塩国豊富遺跡の発掘について

余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告(第一報)

明治初期の北海道開拓政策に関する一考察

アイヌの鮭漁

○第一五輯 一九六〇年三月二十五日発行

民族学的に見た北海道の野猪

アイヌの播種技術と栽培作物

アイヌの口琴

室蘭市旧地名考

網と釣の覚書

白滝遺跡出土の文化遺物

○第一六輯 一九六一年三月二十五日発行

アイヌの神謡 二

林 善茂

和田 完

名取 武光

児玉作左衛門

大場 利夫

児玉作左衛門

大場 利夫

名取 武光

松下 亘

原田 一典

知里真志保

犬飼 哲夫

林 善茂

谷本 一之

知里真志保

山田 秀三

名取 武光

北大調査団

知里真志保

釧路地方のアイヌの川漁(ヤス)について

アイヌの脱穀調製技術

余市郡赤井川村曲川遺跡調査報告(第二報)

モヨロ貝塚出土の土器 二

ブロニスラフ・ビルスツキー著 樺太アイヌのシャーマニズム

○第一七輯 一九六二年三月二十五日発行

北海道地質図変遷史(一)

アイヌ農業の経営形態

白老郡虎杖浜遺跡の発掘について

アヨロ遺跡

シャーマンの憑依行動(一)

モヨロ貝塚出土の金属器

○第一八輯 一九六三年四月二十五日発行

明治以後の北海道測量史

―北日本地図製作製史 第六報―

アイヌ農業の特質と技術段階

―本邦焼畑農業との比較―

千島アイヌの鳥皮衣

林 善茂

名取 武光

松下 亘

大場 利夫

和田 完

佐々 保雄

林 善茂

大場 利夫

扇谷 昌康

竹田 輝雄

名取 武光

峰山 巖

和田 完

大場 利夫

高倉新一郎

林 善茂

犬飼 哲夫

茶吞場遺跡

付伊達町北黄金遺跡群

小幌洞窟遺跡

北大解剖教室調査団

名取 武光
峰山 巖

○第一九輯 一九六四年六月三十日発行

アイヌ服飾紋様の起源に関する一考察

北海道地質図変遷史(一)

鷹部屋福平
佐々 保雄

札幌市有形文化財水木清華亭実測調査報告書

横山 尊雄
木村 徳国

桃内遺跡

越野 武
名取 武光

勇払郡鷓鴣川遺跡

松下 亘
大場 利夫
扇谷 昌康

○第二〇輯 一九六五年十二月二十五日発行

江戸時代初期のアイヌ服飾の研究

釧路アイヌの鮭のテシ漁

アイヌの食生活

北海道地質図変遷史(二)

余市町大崎山遺跡について

函館郊外煉瓦台遺跡

見玉作左衛門
犬飼 哲夫
林 善茂
佐々 保雄
高倉新一郎
大場 利夫
大場 利夫
大場 利夫
蜷子千代志

通観するとアイヌに関する調査研究が大部分を占め、後に埋蔵文化財発掘調査報告が多くなっていて、北海道の開拓史に関する論文がそれに交っている。

見玉委員は北海道大学医学部解剖学教室主任として日本學術振興会學術部第八委員会に参加、アイヌの墓地を大規模に発掘し、研究資料を蒐集した。そのとき、骨格の生物学的研究調査のほか埋葬法、副葬品などを通じて民族学的な研究が不可避な問題となった。見玉委員は、当時ユーラシア北方民族に慣習とさえ見られるほど頭蓋骨の人為的損傷が多く、殊にアイヌに多いといわれる事実に着目し、発掘頭蓋骨を調査した結果、宗教的秘薬として使うために頭部から脳・眼球・骨片などを採取した跡ではないかとの見解を示した。「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」がこれである。

見玉委員の研究はその後骨格の計測による民族としてのアイヌ民族の特徴の把握に向けられるが、一方文献学的、民俗学的調査によるアイヌの服飾調査にも向けられ、後継者となる伊藤昌一が主となって文身・髪容に関する調査を行った。また見玉は文献的にはアイヌの服飾の記録を蒐集紹介し、殊に我が国においては皆無といってもいい中世末期から近世初期の記述に富んだヨーロッパ人、特に耶蘇会士との報告に着目し、その最も古いしかし最も信頼し得る、一六一八年および二二二年に松前に来

航した耶蘇会士ジロラモ・デ・アンジェリスの「蝦夷国報告書」を原著より翻訳・解説して掲載した。アンジェリスの報告書は、ヨーロッパ人の蝦夷知識の基礎となったものであったが、全文翻訳されたのはこれが最初であった。後、札幌光星高校の語学教諭工藤長平が耶蘇会本部・大英博物館その他ヨーロッパ各地の図書館と連絡し、多くの根本史料を発見し、さらにアンジェリスに続いて一六二〇年松前に来た同僚耶蘇会士カルヴァリオの報告を中心にこれを補正した。この論文が児玉・高倉と共著の形になっているのは、当時北方文化研究へ掲載される論文は北大関係者でしかも研究室委員に限られていたからである。伊藤、大場らが児玉委員と共著の形をとっているのも同じ理由である。

農学部応用生物学教室の主任で北海道の動物研究の権威大飼委員は、漁獵民族であったアイヌの鹿・鮭・シシャモ・オットセイ・海豹等の狩獵法とともにそれに付随するアイヌの信仰行事を明らかにし、その根本をなすいわゆる熊祭（イオマンテ）の意義と形式を、従来主として伝承の面から論ぜられていたのを、さらにそれに伴う用具の面から具体的に示した。研究はさらに、骨格が残りながら実際には北海道に住んだ形跡のない野猪の生息を民族学的研究から肯定し、北海道よりはより高度に家畜化されていた樺太犬を研究して発表した。後者は後南極探險

に大きな役割を果たす基を開いた。なお研究はアイヌの丸木舟、臨時に作製使用する木皮舟（ヤラチップ）の製法、重要食品でありながら余り注意されなかった菱の実の収穫利用とそれに伴う儀礼、千島アイヌが常用していた鳥皮衣など、学界に新知見を加えている。

大飼委員が館長をしていた北大博物館の職員であった名取武光助手は、館長の下でイオマンテの詳細な報告をした後、沙流アイヌのイオマンテを通じて神々の由来と幣（イナウ）に卓越した知見を発表し、さらに噴火湾地方のアイヌの捕鯨を発掘し、用具の種類、猟にまつわる信仰類を紹介したが、不幸病身となり、以後は専ら埋蔵文化財の発掘の指導研究に当たるようになった。

委員鷹部屋福平は工学部建築工学科の教授であったが、日本学術振興会の補助を得てアイヌの住居の研究をテーマに優れた業績を挙げた。最も注目されたのはアイヌの住居の構造の分析で、家屋の構造、各部の名称、地方差などを詳細にしたばかりでなく、特にアイヌの屋根には両端にケツンニと称する三脚椎が立てられ、それをチセイツケウと称する横木でつないでいるが、これがアイヌ家屋の基本的構造であり、それに日本式の屋根・柱が採り入れられてきたものであり、基本はアイヌがかかりに建てる丸小屋といわれる三脚椎を、さらに広くするために

ケツンニ(横木)でつないだものであらうと推定した。そしてその構造は、積雪にも地震にも建築学上極めて丈夫な構造であることを指摘した。従来軽視されていたアイヌ建築に建築学的調査・分析が加えられた記憶すべき発表だった。鷹部屋はそれ以外にも研究を進め、「アイヌの計量と音の名称」「アイヌの服飾・文様の研究」に及び、殊に服飾紋様の研究は紋様の地方性、構成、手法などに及び、オロッコ、ギリヤークのそれとの比較から、その起源は中国の殷・周の銅器の饗饗紋・雷文に由来するのではなからうかとの提案をしている。

犬飼委員のアイヌの漁獵生活に関する総合的な研究に対し、アイヌは単に自然物の採取にのみ頼っていたのではなく、少なくともその一部のは原始的な農業を行っていたことに着目し、その詳細を調査したのが農学部農業経済学教室で農業史を担当していた林善茂だった。元来狩猟民族であると規定されていたアイヌが和人とは異なる農業を知っていたことは古くから指摘されていたところであるが、それを詳細に調査して、実態を把握して体系づけ、比較農業史の一部として大きく貢献したのは、本研究報告第一三号から七回にわたって掲載された耕耘技術から食生活に至る一連の報告であった。これによってアイヌの生活はより深く、具体的に理解されるに至ったのである。

アイヌの研究とは全く別に、北海道における移民の活動を対

象とした研究も最初から載せられた。注目すべきは農学部植民学講座担当の上原委員と、同じく農学部の高倉研究員の研究だった。

第一輯、上原委員の「北海道開拓初期に於ける土地制度」第三輯「同第三期」および第五輯「同第四期の土地制度」は、同委員が日本学術振興会第二一委員会の補助を得て行った研究で、近代的北海道開拓の推進に当たって最も根本的な政策、国土地を開拓移民に私有地として与える政策の変遷を、法制と統計との面から詳細に論じたものである。一連の論文は「法経会論叢」「北海学園大学論集」などに載せられて完結し、この方面では最高の研究となったが、研究報告に掲載されたのはその一部で、一八七二年(明治五)「土地売賃規則」から一九〇八年(明治四一)「国有未開地処分法」制定に至る最も活発であった半面、問題の多かった時代の研究である。

高倉研究員および柴田事務担当の協力になる「北日本地図作製史」は、北大に賓客を迎えると必ずともいっていくらい所蔵資料を展示して館長がその説明に当たっていたが、北海道開拓が世の注意をひくことに北海道地図が精確になっていくことに着眼し、その足跡をたどろうとしたものである。研究は我が国古地図の研究に新生面を加えたばかりでなく、我が国北辺史の研究にも新知見を加えた。高倉は近世の樺太を媒介とした日

満交易、実は原住民の物々交換を媒体として日本と満州との間にひそかに行われた交易の実態を紹介して、極東民族と植民者との関係に新知見を加え（第一輯）、千島および樺太における日本人の活動が原住民の生活に与えた影響を論じた（第一〇輯）。第八輯の「蝦夷風俗画について」は、アイヌ生活研究の資料となる、我が国画家によるアイヌ風俗画を解説したものである。しかし第一二輯からは北海道農業史の研究に目を向け、明治以前の農牧業の発達をあとづけ、さらに明治以後の研究に及び、その中で最も注目すべき農牧技術の輸入普及の基礎となった米国人お雇い教師エドウィン・ダンの業績を、筆者が発見、手に入れたダンの草稿「我が半世紀の回想」の全訳と解説によって紹介した。

『北方文化研究報告』は学界殊にアイヌ研究、北海道開拓史の研究に新知見を加えたが、研究が自然科学系統の学者の片手間である色彩が強く、学問にも強い制約があつて、ただ文献にのみ頼っていた社会方面の研究に実証的な面を、自然科学方面の研究に社会的な考慮を加えたにすぎなかったのに、戦後、第八輯復刊号から内容が著しく変わってきた。学問の上に覆いかぶさつていた制約が解かれ、殊に考古学、民族学方面が著しく発達し、北大に文化系統の学部が生まれ、その方面の専門家を多く迎えることができたからである。

東大でアイヌ語の最高峰金田一教授の下にアイヌの研究を志しながら樺太で黙々と研究を続けていた知里真志保が北方文化研究室研究員に迎えられ、やがて北大文学部に迎えられ、驚くべき精力を集中してアイヌ研究に取り組み、先人未踏の分野を開拓し、独自の境地を開いた。殊にアイヌ語、アイヌ文学の研究を通じて掘り進んだアイヌの研究には、語学のみならず、若しくは観察一方の研究家の及びもつかぬ境地があつた。第七輯の「呪師とカワウン」は民俗学的研究に新しい着眼点を与えたものであり、第九輯、第一〇輯の「アイヌの神謡」の分類、第一〇輯の「アイヌ散文物語」などは、第八輯の「樺太アイヌの神謡」とともに、貴重な研究であつた。なお知里研究員は今日北海道アイヌ語地名研究の第一人者として、新しいアイヌ研究の中心をなしている山田秀三を指導して幌別町、室蘭市の地名考を発表し、その後の一連の研究の緒口にした。

アイヌの研究では、樺太で育ち北大文学部に学んだ和田完の、一連の優れた、「シヤマニズム」を中心にした北方民族の信仰生活の研究、谷本一之の「アイヌ音楽の研究」などがあり、従来とは異なつてアイヌ研究に広がりを見せたが、文学部助教授護雅夫が投じたシベリアの民族学研究論文は、アイヌ研究にさらに広い視野を示唆した。

以上のほかに高倉・柴田の北方地図作製史に次ぐものとして

第一七輯より三回にわたって発表された理学部教授佐々保雄の「北海道地質図変遷史」があり、上原委員の論文に次ぐものとして文学部史学科出身原田一典の「明治初期の北海道開拓政策」(第一四輯)がある。

しかし、戦後顕著なものは埋蔵文化財の発掘報告、考古学的研究論文が多くなってきたことである。それは戦前から医学部解剖学教室にあつて発掘に従事していた大場利夫の活躍と、病気のため静養していた名取武光が理学部に属した教養課程で人類学を講義するようになったからである。この人々は仲間と共に多くの発掘を行い、後に北海道のこの方面で活動する峰山巖・松下亘・竹田輝雄・扇谷昌康らとともに、重要な役割を占める遺跡・遺物を発見し、殊に我が国北辺先史文化の解明に重要な報告を発表した。大場は、北海道無土器文化の解明に先駆的役割を占めた北見白滝遺跡の調査、道北に広く分布するオホーツク文化、同じくそれとは異なる網走市モヨロ文化などの大陸との交流を語るらしい遺物の分布する北海道北部の遺跡の発掘調査を行い、出土したラブレット(口角装具)クックルケシ(骨製の婦人帯飾)などの研究によりエスキモー・アレウトなどの諸民族との交流を暗示し、さらに北大構内の遺跡、余市町大崎山の遺跡等、時代の新しい遺跡を発掘調査して、先史時代の研究の幅を広げた。

これに対して名取は、伊達町若生貝塚、虻田町入江貝塚、白老町アヨロ遺跡、小樽市桃内遺跡など主として道南遺跡を発掘調査し、南からの日本文化との交流に貴重な資料を提供した。

『北方文化研究報告』は、従来学界で余り注意を受けなかつた北日本北部が我が国の文化を考える上に重要なかつ豊富な知見を提供する分野であることを示し、それを専門の文化研究者の手に渡す重要な役割を果たしたのである。

(北海道大学名誉教授)